

竹中二郎先生

大井光四郎

竹中二郎先生の長いご一生を通じての研究および教育の両方面にわたるお仕事については別に岡本教授が書かれますので、ここでは別の面から見た先生の想い出の一端を記させていただきます。わたくしが先生に直接指導していただくようになったのは当生産技術研究所の前身である東京大学第二工学部において材料力学と応用数学を担当する教室が出来て、先生が主任教授になられたとき以来のことです。当時は戦争の中頃で、第二工学部の建物も一棟、また一棟と出来上りつつあるような状態でありました。

先生はみずから持することは厳、人に対しては寛、まことに滋父のような態度で教室全員に接されました。昼休みにはみずから卒業して体操をされ、教室員もまたこれに習うというような空気は、ほかの教室には珍しいことであったと思います。

戦争の末期から戦後の困難な時代には戦災や通勤難のために教室に宿泊する人も多くなり、先生も一時宿泊しておられました。わたくしが自室に泊っていると、朝廊下のドアを外からはたきを掛ける音がするので、安眠を妨害するのは誰かと思って飛び出してみると先生なので、「それだけは止めていただきたい」とお願いしても、「なに、自分の部屋の掃除のついでだよ」とすまして言われたことがありました。同じ経験をしたのはわたくしだけでなく、先生にずばらと目された人々は皆その被害を受けたものでありました。このようなユーモラスな教訓の仕方は、叱られるよりも身にこたえました。

この頃の先生は金属材料の疲労の研究に没頭して、細心の注意をもって実験を進めておられ、そのデータは高い信頼を博しておられました。先生はある型の疲労試験機の動的荷重の測定法について精度の上でご不満があり、「この試験機も良いが、ここが何とかならぬものか」と良く話されました。このような力の計測法に対するご関心は亡くなられるまで変わりませんでした。

先生は極めて趣味の広い方で、しかも勝負で凝り性なので、謡曲・釣・スキー・犬・園芸・細工仕事・刃物等と何でも一応の水準に達しなければ気がお済みになりませんでした。そしてその方でもよく後進を指導

され、謡曲や釣のお弟子は今でも当研究所に多勢残っております。先生のご趣味としては末技の方かと思いますが、たとえば刃物についても、二・三十種類の砥石を持っておられ、それぞれを使い分けて愛用されていたことから凝り方が想像されます。わたくしが「ステンレスの刃物は、一般に切れ味が悪いのはなぜでしょうか」とお聞きしたときには、「君、それはこういうわけだよ」と始めて、2時間位お話が続き、「残りはこの次の機会に」ということで終りになったものでありました。

終戦後に東京付近の有志が集って、応力測定研究会を組織して、この方面の研究の、戦争中の立遅れを取り戻そうということになりました。先生は最初からお亡くなりになるまで、約9年間引き続いてこの会の委員長を引き受けて下さいました。先生はこの会を育てることを非常に楽しみにしておられたようにお見受けしました。毎月一回の研究会には必ず出席されて、補聴器を使いながら熱心に若い人の話に耳を傾け、有益な批評や助言をして下さるのが常でありました。

お亡くなりになる三週間前に、研究会の使いとしてお宅にお見舞にうかがった時には、すでに胃の手術の予後が面白くなく、食物もほとんど喉に通らない状態を続けておられました。それでも床の上に座って「明日は千葉工業大学に、まだ当分休ませてくれとお願いに行くつもりだ」と云われたので驚いて、「それほど義理堅くなさらないでも、お使いで済むことと思いますが」と申し上げると、「もう十分長生きをしたから命は惜しくないが、生きている限りは世の中に役立ちたいと思う。病気はずいぶん辛いから、これに打ち勝つものは気分の張りだ」と云われました。続いて手入のよく行き届いたお庭の方に目をやられて、「いつまで生きられるか判らないのに植木屋に手入れをさせているのも気分の張りのためだ」と云われたので、それ以上申し上げる言葉もなく引き下がりました。それらのお言葉とくにそれに含まれている人格と趣味の問題はわたくしにとつて最後の教訓になりました。

なお、翌日はやはり大学まで行かれ、それが病勢を悪化させることになったよううかがいました。

(1959. 11. 12)